広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本近代文学の感覚と精神 ： 作品と事実
Author(s)	ダイテン ジュリエッタ チアキ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1993 : 47 - 60
Issue Date	1994-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039347
Right	
Relation	

日本近代文学の感覚と精神
― 作品と事実 ―

ダイテン　ジュリエッタ　チアキ

はじめに

「日本近代文学の感覚と精神」を題名としたこの研究レポートは夏目漱石の「道草」と芥川龍之介の「或阿保の一生」に基づいています。「作品と事実」と言うものに支えられながら文学の中に表れてくる作品と事実の難しい関係、あるいは作品と現実の微妙な関係を捕えて行きたいと思います。

「道草」と「或阿保の一生」は自伝小説であります。自伝小説と言えば作者が自分で書いた自分の伝記のことです。

「道草」の場合、作者は過去を振りかえり、その過去から続いて来ている現在の存在を作品の中へ移し出して自伝小説を作り出しています。

「或阿保の一生」の場合は　作者は短編の形で自分の存在のいろいろな部分を描き出し、「死」の直前の遺作を自伝小説としてのこしています。

自伝小説を分析することは作品と事実の関系と同時に作品と作者の結びつきが分かって来ることです。

このような形で日本近代文学の感覚と精神を表している作品をテーマにして始めます。

作者と作品の名前：

作者　夏目漱石
　　芥川龍之介

作品　「道草」
　　「或阿保の一生」

(2)

自伝小説の問題

自伝小説を読んで初めに対立する問題は作者と作品の関係です。それは作者は現実のものであり、作品は　作者の手からでき上がったフイクションだからです。

そこで自伝小説の読者として見分けなければならないのは　現実に存在した作者とフイクションに存在している主人公との二つの世界です。この二つの別々な世界は微妙な形で接続している上、類似した部分もあれば、薄い紙のような物で別れている部分もあります。　「道草」の九十一章に出てくる部分「新潮文庫236~237~~ページ」と日本文学史辞典に書いてある漱石の伝記のある部分を比較して例として挙げます。

「同時に今まで眠っていた記憶も呼び覚まされずには済まなかった。彼は始めて新しい世界に臨人の鋭どい眼を持って、実家へ引き取られた遠い昔をあざやかに眺めた。

.....

建三は海にも住めなかった。山にもいられなかった。両方から突き返されて、両方の間をまごまごしていた。同時に海のものを食い、時には山のものにも手を出した。実父から見ても養父から見ても、彼は人間出はなかった。常ろ物品出あった。ただ実父ががらくたとして彼を取りあつかったのに対して、養父には今になにかの役にたてておくろうという目算があるだけであった。」

「道草」

「道草」のこの部分に書き出されたことは主人公が島田という人の所へ養子にやられたことです。そして実家に返された時の状態です。

主人公の健三に対してはその状態は不安定な幼い時代の思い出の一つです。

「海にも住めない。山にも居られない」というこの二つの状態が意味している事は主人公の愛されていなかった強い意識です。親は二人いたが　建三はどちらからも「子」として認められなかったのです。

「日本文学史辞典」で夏目漱石の幼い時代に養子にやられた事に付いてこう書かれています。

「生間もなく里子に出された。/...二歳の時改めて四ツ谷の名主塩原マキノスケの養子に出された。養父母に溺愛されていたが、その底には老後の扶養を目当てにした打算があることを知り、愛に飢え....一〇歳の時、養父母の不和から塩原姓のまま生家に戻った。

夏目漱石のことについて書かれているこの部分には「道草」の中に出てくるものと共通して来るものが多くあります。

漱石が「道草」を書いたとき、自分の幼い頃を作品のなかに描き出して自伝小説の一つの部分にしたのでしょう。

このようなことが　どうして 大切かと言えば答えは二つ有ります。

一つは　作品の上で考えて　この幼い時代に行われた事が今までに影響し、主人公の現在まで響き、愛に飢えた心は不人情に変わり、過去で溺愛を演じた養父母は現在では金を求めに表れます。過去の不幸が現在では作者を苦しませるものとなるのです。

もう一つの大切な面は作者の伝記の面です。作者の伝記とこの自伝小説は深く重なっていることは明らかでありますが、小説自体に書かれている事全てが漱石自身だとは言えません。現実で行われた事実、作品に書かれた事実 、一つ一つの事実は別別な世界の事実として考えなければなりません。そう分別した上、二つの世界で共通している点の関係によって自伝小説を一つのものとして広く解釈することができます。

(4)

自伝小説に置ける作者と作品の関係を　今度は芥川龍之介とその作品「或阿保の一生」について書きます。

「或阿保の一生」は芥川が死ぬ前に書いた自伝小説です。五十一章の一つ一つの短編の内に芥川のいろんな面の人生観を感じとれる事ができます。

この作品は自伝小説でありますが、作者が遺書として残された資料としても受け取られます。

そのつごうで　作者の生まれよりも　作者の死と言うものとこの作品に出てくる主人公の死の感覚と関係させてみます。

昭和四十三年の十一月に吉田精一は「或阿保の一生」のことについてこう書いています。

> 「或阿保の一生」は、原稿に「自伝的エスキス」と割り註がしてあってまつしょうされていたところから見ても、自叙伝の意味を持つものだったことは明らかである原稿ができあがった日時は、久米正雄にあてた附記にある六月二十日という日付によって知られる。彼の遺書「或日友へ送る手記」の中では、自殺の動機を、自己の将来に対する「ぼんやりした不安」のためとしているが、つづいて、「僕は僕の将来に対するぼんやりした不安も解剖した。それは僕の「阿保の一生」の中には大体は尽くしているつもりである」とのべてある。
>
> 新潮文庫（248ページ）

吉田さんが書いているように「或阿保の一生」は芥川の自伝小説と同時に広い意味で遺書として残されたものです。このように作者と作品が固く結ばれた関係は難しいでしょう

この場合、現在とフイクションの問題以外、自伝小説に存在する主人公の死に対する気持ちと小説家の死が重なって来ます。

「或阿保の一生」を自伝小説としてみれば　まず、主人公「彼」が望んでいる「死」はどういうものなのかと考えさせられます。主人公が望む「死」というものはこの作品の中ではずうっと強い印象で存在されています。

こんな死を希望する存在はどうしてこれほども、「彼」を追い詰めていたのかといえば

それは　作者が深く死を意識していたからでしょう。芥川は自殺することをずうっと考え続け、死ぬ決心したうえで「或阿保の一生」を書いたのだと　考えさせます。

そして　その「彼」と呼ばれている主人公の形で自分という存在を描き出し、作家は登場人物を通して自分の人生というものを自伝小説にしたのでしょう。

「或阿保の一生」は作者が書き残した遺書と言うことよりも、「生」と「死」を深く意識して書かれた自伝小説だと言えます。

「或阿保の一生」の四十九章の「剥製の白鳥」を読んでみれば作者と作品の関係と現実とフイクションの関係がどこまで重なって接続しているか分かって来ます。

> 彼は最後の力を尽死、彼の自叙伝を書いてみようとした。が、それは彼自身には存外容易に出来なかった。。。。。。。

彼の作品の訴えるものは彼に近い生涯を送った彼に近い人々の外にある筈はない。----こういう気も彼には働いていた。彼はそのために手短に彼の「死と真実と」を書いてみることにした。

彼は「或阿保の一生」を書き上げた後、偶然或る古道具屋の店に剥製の白鳥のあるのを見つけた。それは頸を挙げて立っていたものの、よこばんだ羽根さえ虫に食われていた。彼は彼の一生を思い、涙や冷笑のこみあげるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだった。彼は日の暮れの往来をたった一人歩きながら、おもむろに彼を滅ぼしに区来る運命を待つことに決心した。

「或阿保の一生」-(文庫~168ページ~169ページ)

この四十九章に「剥製の白鳥」という隠喩の形で表している意味は作品そのもの自体でしょうか。それとも作者自身でしょうか。

「剥製」という意味は「白鳥」という意味と矛盾しています。二つの矛盾したものを一つのものとして並べて　作者を「死」に追い詰める自分の人生の矛盾差を表しています。

「或阿保の一生」が芥川の自叙伝であるように「剥製の白鳥」が主人公にとって人生を象徴しているものならば、「阿保」と「剥製」は同じ面で、愚かさ、あわれ身、束縛した意味をもち　、「一生」と「白鳥」は美しい　「美」の感覚、理想、完璧なものを表したいのだと解釈できます。

この二つ矛盾している意味を通して作者が作品のなかに込めた　「真実」を見つけ出し、やっと作者と作品の関係を明らかにすることができるでしょう。

作者と作品の関係を明らかにした以上、自伝小説の問題を解決したと言えるでしょう。

フイクションと現実の関係

フイクションは英語のｆｉｃｔｉｏｎ を外来語にしたものであり、想像や空想によってつくられたことです。

現実は事実として現に今あることです。実際の姿や状態を意味しています。

自伝小説と呼ばれる作品はその二つの面があります。フイクションと作者が経験した現実が一つのものとして文章の上に表れます。

私の考えの上では　小説自体はあくまでもフイクションです。現実で経験したことを小説化することによって新しい事実を生み出すこに係わると信じています。現実を書くことは　作者の現実を作品のなかの現実に変えることです。そしてその変えることが小説化であり、フイクションと言うものに変化することです。

多くの自然派の文学者たちは　現実をそのまま書くことにこだわり、フイクションを除いた作品を書くことを理想としました。が、そうすることによって作品の文学観がおとろえ、真実を得ることから遠ざかって行くといえよう。

文学の上で　もともと求めなければならないものは現実よりも真実です。現実だとか、実際に行われたことか行われなかったことだとか言う問題より大切なのは　小説がどのように作品の上で真実を表しているか　言葉の内側ではどのような真実が存在しているかです。

「道草」の或る部分を取りだし、フイクションと現実の関係について考えましょう。

「健三は海にも住めなかった。山にも居られなかった。」

（「道草」　新文庫－九十－　）

この文に描き出されている「海」と「山」はただの海でもただの山でもありません。作者は海と山を隠喩として表しています。隠喩を使ってなにを指しているかと言えば二人の「人」を指しています。

「海」と「山」は建三の実父と養父の象徴です。

「海」が実父のことを表しているならば　「山」は養父のことを指しています。

では、「海にもすめなかった．．．」と言っている意味は　主人公は実父のところに住むことが出来なかったと言う事を表しているのです。

そのうえ「山にも居られなかった。」と言うことは　主人公は養父のところにも子として存在できなかった事を指しているのです。どっちの親からもいる所を決めてもらえずどっちからも見捨てられた状態をメタフアーで表しています。

海と山は全く違ったべつべつな自然界のものですが、同じ文章の上で並べていることは偶然ではないとおもいます。作者はこのような別なものを同じように並べて主人公を見捨てた不人情な父達を同じ立場に置いて表しているのです。

「道草」の主人公、健三はこのようにして幼い時の不安定な状態と父達から示された並み外れた幼年期の内で描き出されています。

今度は芥川龍之介の「或阿保の一生 」の一つの部分を取りだし、フイクションと現実の関係を考えながら分析してみます。

「彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかった。
が、この紫色の花火だけは、ーーー凄まじい空中の花火
だけは命と取り換えてもつかまえたかった。」
(新文庫- 八)

八章の「花火 」と言うこの部分では主人公は「人生」と言うものに対して希望と言うものを亡くした状態です。そこへ 「花火」というものが表れます。その「花火」というものは「彼」にとって人生よりも望ましい物として表れます。

こんなにも強い存在を求められる 「花火」は何を意味しているのでしょうか。

「花火」の隠喩が何を意味しているのか分かるためには花火自体を考えなければなりません。花火は 紫色であり、凄まじいとも書いています。紫色は強く濃い色です。 「凄まじい」と言う意味は勢いや 程度が恐ろしいほど激しいことをいいます。 花火は 「命」の象徴だと解釈できます。

こんな意味から取っていけば、「花火」は主人公が憧れている「悔いのない」生活 の隠喩です。 彼」は熱く一生懸命に短い人生を燃やしてしまう花火のような命を理想とし、自分の命と「. . 取り替えても. . . 」ほどの価値であった。

でもそれはあくまでも届かない理想として作者は描いています。だからこそ「花火」のように「空中」に存在する幻のような隠喩を使ったのでしょう。

花火は空中で凄まじい存在を持ち、「彼」は地上で 希望のない人生を存在していることを強調しています。

「花火」の隠喩で表す主人公の理想化は「或阿保の一生」の内でもっとも悩ましい現実と理想が対立している姿です。このような対立を広く捕えたら 「生」と「死」に関係して来ます。

登場人物

「道草」の登場人物は健三と言う主人公が存在しています。その主人公と関係している人物達が　他の登場人物です。

主人公の人間関係を現実的に捕らえた作品です。

健三に対して日常で一番重要な役割を果たしている人物が妻の御住でありますが作品の上では　島田と言う、　もと養父であった登場人物も大切な役割を果たしています。

それ以外、建三には　姉と兄が一人います。

子供は小説の初めに二人娘がいますが、もう一人生まれて　三人の娘になります。

姉の夫、比田と言う従兄弟にあたる男もいます。

その上、養母の御常というお婆さんも出てきます。　島田に頼まれて来る吉田という男なども出て来ます。気が合わない妻の父も現れます。

主人公	健三
他の登場人物	妻　島田　姉　兄　比田　吉田 御常　娘達　妻の父

「道草」の内でつながってる主人公と他の登場人物のことについて考えましょう。

主人公の健三は当時、三五、六の男である。彼は故郷に戻り、東京に住むことと同時に過去を振り替えらなければならない状態に立ちます。

過去から湧き出して来る人々のうちから一人、特別に気にかかる島田と言う男が現れます。

島田は健三の養父に当る人です。　この作品の主人公の過去と一番深く　係わっている人物です。　そして現在に突然、雨の日の朝、健三の前に現れます。

その場では　「帽子を被らない男」としか　書かれないが、その帽子を被らない男は健三の過去を読み替えさせます。現在に現れた過去の養父は評判の悪いだけあって、健三のお金を狙って座敷に上がるようになります。

過去に縛られた健三は仕方なく付き合い、付き合うに従って自分の不幸な過去を甦らせることになる。そして片付かない過去を抱えながら現在に立って苦しみ続けている主人公です。

健三と健三の妻、御住との関係は島田と比べれば　もっと現在の日常的な関係だと言えますが、ここには過去の問題というよりも個性の問題が存在していると言えましょう。健三と御住の夫婦関係はお互い分かり合うことをしない状態です。

「細君は夫の前に広げてある赤い印の附いた汚ならしい書き物を眺めた。夜中に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面側が建三にわからないように、この半紙の山を線密に読み通す夫の困難も細君には想像出来なかった。」

（「道草－　九十四　）

九十四章に書いている通り、健三と御住は全くお互いを理解し合うことができず、夫婦でいながらも別々な世界に生きているようになってしまう状態です。

健三は書斎で学問の世界に取り終っていて、細君は主人よりも子供だけを生きがいにして生きていきます。

御住は実用的なことに基づいていて「役に立つか、立たないか」で価値観を決めてしまう性格でした。

健三は逆に実用的なものよりも学問的なものに基づいて精神的な価値を求めていました。このように違った性格と価値観の対立した夫婦を日常性の内で描き出されています。そして二人の論理は

「二人は又同じ論の上をぐるぐる廻り始めた。」

（「道草」　九十二　）

と書いています。

この節に含まれている意味は二人の間に存在する行き違いはいつまでも変わりなく、片付けられない問題の一つとして続くのだと解釈できます。

島田が片付けられない過去の存在である事と同じように　彼等の理論の悔い違いも片付けられないまま　いつまでも同じ問題の上を「ぐるぐる廻る」ように繰り返すほか仕方がない用です。

こういう点で共通している面だともいえようが、科学的な論理の存在こそ、もともとの基本になっていると言えましょ。

姉に対する係りは関係というよりも残された一人の親類として表しています。健三の姉に対する気持ちは哀れみの感情に近いと言えましょ。姉は遊ぶことしか考えない夫を持ち、今では健三から少ない小使いをもらい、喘息で苦しむ状態の女です。

兄は貧しいながらも過去の男であり、健三とは特別親しくないが、　島田は昔父から縁を切られた男なので　健三との付き合いに強く反対します。

健三と細君の父との関係は少なくとも良くない方です。健三はその父の為にお金を借りる義理になりますが二人の関係の間には暑い壁を崩すことが出来ないままです。

健三の昔、養母になってくれた御常。以前、健三に手紙を送って助けを求めましたが断れました。　現在にまた現れ、健三から五円貰って帰っていく状態です。

姉の主人、比田は遊び人であり、妻をぜんぜん大切にしない男であるが　健三の幼時によく一緒に遊んでくれた男です。

健三は娘三人がいます。一番下の娘は生まれたばかりの赤ちゃんです。でも、彼は自分の子供に対しても不人情な状態であり、それも奥さんの不満の一つです。

主人公と他の登場人物の関係を比較した上、明らかになったのは健三が彼等から離れた立場にいると言うことです。

その状態は彼等との関係だけに表れてくるのではなく、健三の考えや思想に言葉として表れてきます。

「彼は親類から変人扱いされていた。」

（　三　）

「彼は一人の腹違いの姉と一人の兄があるぎりであった。親類といったところでこの二軒ともとあまり親しく往き来をしていなかった。」

（　三　）

「彼を知っている多数の人は神経衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じていた。」

（　二　）

「学問の力で鍛え上げた彼の頭から見ると、その明白な論理に心底から大人しく従い得ない細君は、全くの解らずやに違いなかった。」

（　十　）

主人公が他の登場人物と対応できない理由は小説の始めでは学問の違いのせいだと言ってますが、最後に近くなって来る部分ではこう書かれています。

「一方から見ると、他と反り合わなくなるように、現在の自分を作り上げた彼は気の毒なものであった。」

（　九十一　）

この部分から健三のことを解釈するとしたら　「現在」と言う言葉をもう一度　問題にしなければなりません。現在は過去に接続しているとして考えてみれば　今の主人公を作り上げたのは　過去の主人公だと言えます。

過去の建三に失われたものが　信用と愛ならば　現在の建三には人を信用することも愛

することも出来ないでしょう。

このようなことを健三はこのような論理で表します。

「世の中に片付くなんてものは殆どありゃしない。一遍起こったことは何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解からなくなるだけの事さ。」

（　百二　）

健三というこの登場人物は最後まで過去から軽減されず、自分を替える事もできず、科学的な論理の上で人間の生涯というものを指しています。

「或阿保の一生」の中に出てくる主人公は「彼」と言う名のない三人称です。この主人公と他の登場人物との関係は隠喩的に表している場合が多いです。

主人公	彼
他の登場人物	狂人の娘　親友　母　先生　月の光の中にいるような女性 そして多くの西洋の署名人

「或阿保の一生」の主人公と他の登場人物の関係よりも　主人公「彼」の感覚から表している人物や隠喩の意味の解釈に基づいて分析します。

題名に書かれている「阿保」は芥川自身を指しているようですが最初は「彼」という主人公のことを表しているものです。

この「阿保」と言う意味の理由を考えてみると絶対知識の持っていない人物を指しているのではないと分かります。主人公は溢れるような知識の持ち主であり短編を書く人であります。作品の内で指している「阿保」は人と言うよりも「人生」と言うものを指していると解釈しました。「阿保」は自分の人生と言うものを束縛した表現でしょう。

一生と言うような高貴な表現と阿保のような価値の下がった表現と一緒にすることによって主人公に対する矛盾差が発見できます。

「或阿保の一生」の三五章の「道化人形」に描き出した矛盾差はこう表しています。

「彼はいつ死んでも悔いないように烈しい生活をするつもりだった。が、不相変わらず養父母や伯母に遠慮勝ちな生活を続けていた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。彼は或洋服屋の店に道化人形の立っているのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云うことを考えたりした。が、意識の外の彼自身は、－－－言わば第二の彼自身はとうにこう云う心もちを或短編の中に盛りこんでいた。」

主人公は道化人形の隠喩を使って自分の状態を表しています。

道化人形は人を笑わせる面白い役割を意味しているものですがこの場合では主人公の果たせない希望と現実の矛盾差を苦笑するように描き出されています。

皮肉のように苦い形で「それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。」と自分の中で二つに別かれてしまう明るい面と暗い面の存在を訴えています。

それを広い視点で解釈するとしたら主人公の一生という感覚につながるでしょう。その一生という感覚は二つの面の上で「生」と「死」にまとまるでしょう。

「生」と「死　」に対応した主人公の両面は作品の内で深い存在を持ち、対立しながらも存在し続け、芥川が言うように「僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしている。」このように矛盾しながら存在している自己の表しであると解釈できます。

矛盾を説明するには矛盾でしか表すことの出来ない「自己」の苦しむ姿を理解せねばなりません。だからこそ隠喩として描き出されたのでしょう。

「或阿保の一生」の主人公と他の登場人物の関係を捕らえるには　主人公の感覚を通しながら描き出されてる人物だという視点が必要としています。

「或阿保の一生」の第十章に出て来る「先生」をどのように描き出しているか考えてみましょう。

> 「彼は大きいかしの木の下に先生の本を読んでいた。かしの木は秋の日の光の中に一枚の葉さえ動かさなかった。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保っている。－－－彼は先生の本を読みながら、こう云う光景を感じていた。」

「先生」と言う人物は現在では夏目漱石を指しています。芥川にとって漱石は尊敬の上に立っていた理想の学者であった。

漱石は「先生」という形で描き出されています。その上、「かしの木」は漱石自身の象徴としても解釈できます。

主人公の感覚の内に存在する「先生」は「大きなかしの木」のように大きな存在をもっています。

作者は「彼」がいた光景を通して「先生」と言う存在の持つ人物を描き出し、自分にどれほどの大切な存在なのかを示しています。

そのかしの木の下にいるという状態から意味をとって行けば、「先生」は自分より上にいるという立場が明らかになり、先生から見守られているという感覚もあります。

このような関係を取り出してみるこによって言葉の底に存在している意味が分かり、主人公を通して作者が表している世界観をつかむことが出ましょ。

作品の中の時間

作品の中でも時間と言うものがあります。普通は過去、現在、未来、という時間の流れが存在します。

「道草」の中の時間は二つに分かれています。一つの時間は作品自体が現在から未来現実的な時間です。もう一つの時間は主人公の記憶の中から湧き出してくる過去です。

作品　　現在 ⟶ 未来
記憶　　現在 ⟶ 過去

もちろん、どっちの時間の流れにも過去、現在、未来という時間の存在はありますが　記憶の中の時間は順番がまとまっていないのです。

作品自体の時間は順序にまとめられます。

健三は或る日、島田と道でばったり会う、それから島田は健三の家に出入りするようになる　最後に島田は健三の金を欲しがるようになり、百円で関係をかたずけます。

記憶の中の時間はいろんな過去の部分が時間の流れを無視して出てきます。

現在の健三は島田に会い、幼い時を思い出す。幼い時の或る部分を思い出しますがまた現在に取り戻します。現在にいながら記憶は健三を過去へ連れ戻す。こういう繰り返しを重ねながら記憶の中の時間の流れを繋ぎ当てたもののように作られていきます。

「或阿保の一生」の中の時間は瞬間と言うその身近な時間を永遠に残すように一つ一つの短編に吹き込まれています。でも、具体的に言うと作品に存在している時間は過去を繰り返して書いています。

小説の中では過ぎたことでも現在のもののように生き生きした存在を持つことができます。

「道草」と「或阿保の一生」の時間の表し方を比較するとしたら「道草」のほうが現実的だと言えます。「或阿保の一生」の時間は小説化している時間だと言えましょ。

作品の中の風景

風景といえば登場人物が存在している場所をまず、考えます。風景こそその作品が書かれた国の美の感覚やその存在している所の特徴などを表すものです。

「道草」では日本の家庭というものを強く意識させます。イメージとして薄暗いど

んよりした素朴な風景を印象に残します。この作品の中では活動はこのように限られたものの中でおこり主人公の記憶力の内で行われる過去を中心に描き出しているようです。

「道草」は外の風景というよりも「内、中、家」と奥へ奥へと関連していく自分の中の風景にこだわっているといえます。

「或阿保の一生」では外に存在する風景から意味というものを発見して自分の中に存在する風景を身につけるようです。

「道草」　「内」に意味を求める
「或阿保の一生」　「外」に意味を求める

作品と感覚

最後に「道草」の「道」は何を意味しているのか解釈したものを書いてみたいと思います。そして「或阿保の一生」に出てくる「死」と 「生」の存在の意味を取り上げてみたいと思います。

「道草」の「道」と言うものは人の道を指しています。もっと広く取り上げれば人生だと解釈できます。自分の一生はどのように組み建てて来ているのか、自分が選んだ道とはどのような遠回りをしているのか悩み果てた上、「草」というものを加えたのでしょう。人生なような一本道を真っ直歩けない、草が生えているいるような道を歩いしまう自分自身を示しているのでしょう。

道と草は象徴的な意味から取り上げていけば矛盾している価値観を持っています。道がプラスな価値を表しているとしたら草はマイナスな価値の表現だといえます。

この二つの意味の関連をつなぐことによって作者が描き出している人生観を得る事ができます。

「或阿保の一生」の中に描き出されているのは人生の二つの面です。

それは芥川の生の面と死の面です。

この作品の中で何よりもこの両面が対立しています。死に向かって行きながら一生を振り返り、生きる事を描き出しながら遺書として残しました。

このように矛盾を過ぎて 理想の人生を得られない自分に絶望し、残された価値のない人生を死の形で解決する自己の存在でしょう。

このように割れた面は作品の上でこそ一生の一つの面として存在するでしょう。

漱石が「道」と象徴的に描かれた人生を芥川は生と死を通した「一生」として表しています。